

テスト

ゆるひこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いわゆるメツブレイド。ゼノブレイド2のネタバレあり

目次

テスト

1

テスト

地を覆う摩天楼の中、ひときわ大きくそびえる一本の塔があった。雲を貫く塔の足元に、その影のごとくたたずむ一人の男がいる。

ただ腕を組んだまま、雲にさえぎられてみることでできない生まれ故郷——塔の頂を見上げている。

そこには音がなかった。

静寂が支配する世界で、そこに唯一存在する男は孤独をむさぼっていた。

心地のいい世界だ。かつては身を焦がさんばかりだった“渇き”も、醜く争いあう人間たちも、生きること邪魔してくる敵もない。

——それは、なのだ、なのに。

背後から聞こえてくる小さな足音を聞いたとき、全身の血が沸き立ち、止まった世界が動き出すのを感じた。

「すげえ……まるで世界樹みたいだー！」

少年は間の抜けた顔で塔を見上げながら、近づいてくる。

「まさにそれそのもの。てめえらの世界に中心にそびえる世界樹だ！」

男は「来客」のほうへ向き直る。

「よう小僧、はじめまして、だな」

「あ、ああ……うん。はじめまして……」

少年は、たじろいだ。大人との会話は慣れているつもりだが、何しろ相手は背が倍ほども違う、筋骨隆々の鎧の大男だ。

しかし、礼節には礼節を自己紹介することにした。

「オレの名前は——」

「レックス、だろ。知ってるぜ」

「えっ、なんで……!?!」

「触れたら俺のセイレーンのコアに、そのときにな。お前さんだって知ってんだろ
う、ブレイドとの同調は」

確かに聞いたことはあった。コアクリスタルと人間が同調したとき生まれる亜種生命体、ブレイド。彼らは生まれた時から自らの名前も言葉も、そして同調した人間のことも理解しているのだと。

だが、それを聞いて一つの疑問が浮かんだ。亜種生命体に共通する特徴がその男にはなかったからだ。

「じゃあ、あんたはブレイドってこと?でもあんたの胸にはコアクリスタルがないよ」

「まあなあ、こうしてここに居る俺は影……幽霊みたいなもんさ」

「幽霊？」

男は自嘲気味に笑ったが、レックスはその意味を理解し兼ねた。

「ここはどこの。雲海も全然見えないし、アルストとは思えないけど……。まさか、あの世とかじゃ……！」

「あの世か、言いえて妙だな。ここは俺の走馬燈の世界、死者の国^{モルス}つてわけだ」

「……」

レックスはあたりを見まわした。地に生える建造物は、直方体や立方体でどの巨神獣^{アルス}でも見ないデザイン、建材でできている。一つ一つが王城に匹敵する大きさで、そんなものが果ても見えないほど続いている。

500年前までアルストに君臨したというイーラ、ユーディキウムすら凌ぐ文明があつたのだと想像できた。

この世界を包んでいる不気味な静寂は、死者の国だというには十分だったが、目の前の大男の妙にギラついた眼を見るとそうは思えなかった。

「オレ死んだってこと？そもそもオレ何でここに居るんだっけ……」

記憶をたどってみる。

覚えていたのは大きな胸像——腕も足ももがれ、コアクリスタルのようなまがまがし

「奴らが狙っていたのは俺だ。アーケディアは俺の存在を許さない。俺に接触しようとする人間もだ」

アーケディア……：そう法王庁だ！あのドライバーたちの仮面と法衣、あれは間違いなくアーケディアだ。

(アイツら、神の言葉の代弁者なんて言っているけど、やっていることは単なる虐殺じゃないのか!?)

だが怒りは絶望へと転化する。

ここは死者の国と、男は言った。つまり……。

「オレは死んだのか……。結局何にもならず、『楽園』も行けないまま……。あんなに大見得切って夢をかなえるんだって、村を出て行ってこの様か……。ハハ」

力なく笑うレックスだった。しかし、男は飢えた獣のように笑った。

「小僧、力が欲しいか？」

「えっ？」

「お前はまだ死んでない。もつともこのままじゃ確実に死ぬ、運命ってやつさ。誰もあらがえない世界の流れ。だが、俺の力を使えば生きられる。生きて、神の住む楽園へ行くつつう夢も叶う」

「オレの夢、どうして」

「言つたらうが、俺がお前のブレイドだからだ」

男は笑っている。それは生きようとする意志を持った目だった。

不思議だ。この男は自分を幽霊だと言いながら、生きているはずの自分よりも元気なんじゃないか。レックスはそう思うと、口の端が上がっていることに気づいた。

「あんた図体でかいくせにオレの夢を笑わないんだな。みんな楽園は禁足地だつて、アーケディアに従つてるのに。あんた何者なんだ？」

「なーに、俺は天の聖杯。〃神〃^{おやし}が造り、雲海へと放つた遣いだからな。楽園つたつて、俺にとつては故郷みたいなもんさ。それをだれが禁じられる？」

男は不敵で、何も恐れていない。たしかにこの男は、楽園への道を切り開いてくれるだろう。そう確信するとともに、どうしても腑に落ちない点があった。

「なるほどね！故郷への道なら迷うことはなさそうだ。でもさ、この話ちよつとできすぎだよ。あんたは力をくれるけど、オレは何を返せばいいのさ。〃幽霊に体に乗っ取られました〃なんてオレはごめんだよ」

「へっ！甘い話にホイホイ乗るようなガキじゃないつてか。そう俺は幽霊、肉体もなければ力もわずか。完全な復活のためにも、小僧、お前の身体が必要……つてオイ！何逃げてんだ！」

レックスは胸を手で覆いながら、内股でズザザツ！と下がった。……いや、そういう

話じゃないのはわかってるんだけど。

「俺からの要求は2つ。現実で活動するための肉体を構成するための遺伝子情報。ま、実質的に通常の同調と変わらん。小僧には何一つリスクはない。ただ俺が不安定になるってだけだ。だがもう1つ、俺が残した剣……モノダの恢復。これはやってもらう」

「モノダ……それが力？もしかして、その剣のおかげで幽霊のままいられるのか」

「勘がいいじゃねえか。そういうこつた。モノダは俺の力で俺自身でもある。だから手にすれば俺は完全復活！確実に楽園まで行けるだろうさ」

このままでは死ぬ。そういう状況ではあるが、追い詰められて仕方なくではない。前向きな気持ちで楽園へ行ける。

滅びゆく世界アルスト、神の怒りを買った人間。そういわれたって受け入れられわけがない。

争いのない楽園があるなら移り住めばいい。神様を怒らせたっていうなら、許してもらうまで謝ればいい。

そして何より知りたい、アルストこの世界の外を。未来を。

雲海に沈んだサルベージ品はおもしろい。役にも立つ。

でも下ばかり見て終わりたくない。空に輝く緑葉のその先を見てみたい。

「どうする小僧？俺とともに世界にあらがうか。運命を受け入れ死を待つか」

大きな手が差し出される。背だけじゃなくて手の大きさも倍あるんじゃないか。

「別にいいけどさ、名前も知らないやつとは組めないかな」

「ん？そういうや名乗ってなかったな。俺の名はメツ。気軽にメツ様って敬ってくれてもいいんだぜ」

「よろしく、メツ！」

ガシツつと握手が交わされる。固く握手してくるので、その分握り返すと、また強く握ってくる。ふふふ、ハハハとお互い意地の張り合いをして、離れた時には感覚がなかった。

「これが世界樹なら、楽園はこの上にあるんだよな……」

少年と男は二人で空を見つめる。塔の頂は雲に隠れて見えなかった。しかし、彼らには未来が見えていた。楽園へたどり着き、神に会う未来が。

「そうだ。小僧、俺が楽園へ連れて行ってやる！」

欲する男と願う少年。

こうして二人は出会った。出会いとは別れの始まりとも気づかぬままに。